雄志の風

発行所
関市市平賀長峰
岐阜医療技術短大
同窓会
☎(0575)22—9401

会誌発刊を祝して

岐阜医療技術短期大学長　小林瑞穂

本年も昭和四十八年の開学以来十五年目を迎え、この間短期大学への昇格など卒業生の皆さんにとって大きな変革がありましたが、諸先輩は良く同窓生をまとめ、良く団結して今日の発展への基礎をきづいて頂いた事について心から謝意を表わします。

現在の医療界は現場に勤務している皆さんには、その時代のいかに急な事かは充分に理解している事と思います。臨床検査技師の世界では、現在約九〇〇〇〇人の有資格者のうち病院勤務は約三五〇〇〇～四〇〇〇〇人です。そして毎年の国試合格者数は約四〇〇〇人と丁度10％に相当します。一方、検査機器の発達は実にすばらしく、従来は用手法から部分的な自動化へ進んでいたものが、最近ではすべて全自動化へと進み、更に院内に諸業務のコンピューター化に伴ない、すべてが自動化ラインに乗る様に組織化されて来ています。これらの事は臨床検査技師に一層の検査技術と高度な知識を要求すると同時に一方ではコンピューターを含む機器に精通した人材を要求していく事になります。医療界では今、医用工学士の資格について議論しておりますが、臨床検査技師にとって大きな課題を背負うことになると思います。一方、放射線技師の世界についてみますと、現在日本の様な広範な免許特権を認めている国は全世界にないという事です。放射線技師は今迄の有資格者が約三五〇〇〇人あり、その中で病院勤務の技師数は約二八〇〇〇人です。この二八〇〇〇人と云う数は、必要総人員の約七〇％に相当し、現状では極めて不足の状況にありますが、最終必要人員が三五〇〇〇人としますと年一五〇〇人の有資格者が出ますので、数年を経ずしてこの世界も飽和に達します。また、この世界も一方では技術革新が進み、放射線を用いない診療機器の開発が進み、将来はこれらが診断の主流をなす事は誰にも予測される事です。一方治療面での放射線の利用ですが、癌治療が免疫学の進歩や治療薬の開発により内科的に可能となる日もそう遠くない将来にある様に思います。

いずれにせよ人体に放射線を照射する事の出来るという業務特権はその価値を失う可能性があり、技師会でも放射線技師の業務の拡大に努力しています。また今後の病院の在り方については適正配置法の立法化に伴い、新規の病院が出来なくなったり、更に十六兆二千億の医療費の急速な増加を抑制する様厚生省は勿論政府をあげて目下検討中であります。この一助として、ケースワーカー、ケースワーカーの制度が養成施設を含め立法化されています。

以上の様に医療を取り巻く環境は決して楽観できる様な状態にはありませんが、この中で如何にして生きのびるかが問題です。簡単な言葉で云えば、質の高い有能な技術者となることですが、これはなかなか至難な事です。如何なる人材もこれを育てる環境がなければ育つものではありません。今本学はこの事を極めて重視し、その一つとして教育も個人の特性を良く見つめ、それに合う勉学のメニューを与える様に努力しております。またカリキュラムも教育内容も医療の将来を展望し、その再編成にとりかかっております。これが実れば医療界に誇る卒業生を送り出せると確信しております。そして同窓生の皆さんには、この様な卒業生を更に大きく育てて頂き度い。そしてその事が将来同窓生の諸先輩が医療の世界で生きる喜びを味い得ることにもつながるものと思います。

医療の世界では一般に学閥と閨閥と云う言葉が良く使われます。あの病院はどこそこの大学の系統であると云う様に極めて良く系列化しております。何故このように系列化されていくのか考えたことがありますか。簡単に云えば、同じ釜の飯を食べた人間が一番良く信頼出来ると云う事です。何故信頼が必要かと云えばそれは医療には絶対的確定性がないからです。卒業生の皆さんにも是非この事を頭において頂き度い。要は先輩に尽くし、後輩を育てる事が自己の陶冶にも連らなり、医療界で生きる最も最善の方法である事をやがて知らなければならない年令に達しようとしている人達も多くいる筈です。その為にも是非自己の研鑽に努めて頂き度い。そして是非とも立派な後輩を育てて頂くようお願いいたします。

最後ですが、卒業生の皆さんのご健勝をお祈りいたしまして会誌発行のお祝いの言葉といたします。

〝群青の風〟創刊号の発刊にあたって

同窓会長　増田　豊

うしろを振り向けば、機関紙実行委員の皆さんの会話が飛びかい、部屋中熱気がたちこめています。

記念誌製作以来の編纂作業が行なわれつつあります。

機関紙は、過去数回に渡り発刊されてきましたが、どれも中途半端な形で終わっています。

このような機関紙では、全国の会員の皆さんに短大の状況や、OB会の活動状態の把握ができません。

本機関紙は、会員の皆さんの要望に基づき、この紙面を利用していただき、交流をはかる一手段として存在づけられるような、長期的展望に目標をおいて創刊されることを念頭に、継続されることを願ってやみません。

こと二、三年のOB会の活動は、閉校記念同窓会、記念誌発行、全国学会に於いてのM・R科同窓会などですが、どれもが本部主催のものでした。この自然に恵まれた岐阜の本部からの活動には限界があります。

OB会本部は、只今支部での活動の活性化を願っています。いままでの支部というものは、紙面上の支部でしかなかった感があります。

これからは、支部でのOB会の親睦や交流をある程度重視しつつ、本部との連絡をとりながら進まなければならないと思います。

もちろん本部は支部での活動に対しては、支援をおしみません。

会員の皆さんから集めました、終身会費の還元方法としても有効な手段なのです。

これからは、支部と支部、支部と本部のパイプ役の一つの方法として、この紙面が利用されることをおおいに期待しています。

本年度の本部の活動内容としまして、機関紙発行、国家試験時の昼食提供と激励、卒業生への記念品贈呈が主な活動内容ですが、支部からの要望にも柔軟に対応していきたいと思っています。

また、短大側とのコンタクトも、これからは今以上に密接なものにしていきたいと思います。

学生の実習病院、実習内容、卒業生の就職問題などは特に重要課題です。

この辺の問題は、短大の代表者、できれば学長とOB会が対談をもってして相互の関係を保ち、協力していかなければならないのでしょう。この問題は支部にとって、これからはことのほか、短大側からもOB会からも注目を集めそうです。とくに短大側は、岐阜を中心とする中部における就職状況が困難になってきていることで、どうしても地方へ目が向けられます。就職するには、その地方の就職先との接触が必要になってきます。そこで会員の皆さんの存在がクローズアップされ、短大側の長期の休みを利用した伊勢まいりが活発化します。そういう状態の内でOB会の重要性も増し、多分OB会の支部活動、機関紙発行など援助の手がさし出されたのではないでしょうか。

OB会もその点は、支部活性化の上で非常に良い意味で興味をもちたいと思います。

次に学生の病院実習についてですが、技術や学問もさることながら、これからの医療界は患者さんを中心とした医療システムが重要視されています。

学生一人一人の人格形成というものが職場で育成されることも必要ですが、それ以前に学生時代に視野を広げ、それを職場に生かすような、人道的で謙虚、熱心な人を職場は望んでいます。

OB会もそのような後輩が短大から巣立っていくのを期待し、短大側に働きかけたいと思います。

簡単ではありますが、支部のこれからの活動に期待し筆を置き、あいさつとかえさせていただきます。

閉校記念同窓会　清心寮にて　S 60.3.31.

在学生の現況について

学生部長　杉浦　武

卒業生諸君の後輩六一八名（内女性二六三名）が在学しており、定員はM・R各々八十名、両学科在学生はほぼ同数であります。女性の割合はM学科七三％R学科十％で国際医学の時代より少しずつ増加傾向にあります。七月よりR学科棟北側を駐車場、本館南側の県道迄の土地に運動施設を作ることへ向けての工事が実施されており、キャンパスも一層広くなってゆきます。また、学科増それに伴う新館の建設予定もあり益々充実していくことでしょう。本学への志願者は増加傾向にあり、今春の入試では三・六倍の倍率でありました。入学後は国際医学と同様ハードな講義・実習や大学祭（昭和六十年復活）が待っています。諸君達の社会的評価は高く、我々はそれを学生に引き継ぐべく学生に教育、指導しておりますが、諸君にも病院実習、就職、その後の指導をして頂き、より良い学生を輩出し本学の良き伝統を作りたい次第であります

す。卒業生諸君の健康と益々の活躍を祈っております。

同窓会誌発刊によせて

診療放射線技術学科長
久保田　保　雄

私が本学に来てから二年しか経っていない。同窓生としてはほんの新米である。だから同窓会のなんたるかをも十分に知悉していない。

しかし、短期大学の一、二回卒業生を既に送り出しているし、今後も何回かの卒業生を送り出すことになるだろう。

従って本学の同窓会員の一人として今後共お世話になるだろうし、卒業生始め同窓会の先輩にこの紙面を借りて宣しくお願いをしておきます。

さて、この数年間に就職する臨床病院の内容も少しずつ変わってきている。大学病院や国公立病院は勿論だが、ベッド百床前後の中小私的病院でも放射線科における仕事の内容が高度化、複雑化してきている。診断・治療共にコンピューター化が進み、診療機器の精密化が進んでいる。そしてこれらの装置を駆使した診療は濃密になり、時間もかかるようになり、中小病院でも午前だけでなく午後まで診断・治療を行っているところが増えてきた。

従って夫々の病院で放射線技師の必要性が高まってきた。

また法律的にも免許を有する放射線技師を雇わざるを得ないという背景も見逃せない状勢になってきた。何れにせよ国公立の大病院での求人が減少し、中小病院の求人が増加しつつある傾向が強くなってきている。そこでこれら求人就職に関する情報が重要になってくる。この情報入手の最もよい方法は、同窓会員からの連絡網と思われる。幸い本学の同窓生は日本全国に広く就職しているので、本学と同窓生との情報交換を更に充実したものにしなくてはならないと思う。

同窓生諸氏には就職に関するよい話だけでなく、苦言・忠告・アドバイスなども遠慮なく本学職または後輩学生に寄せて載きたい。

同窓会紙の発刊をチャンスに今まで以上の情報網作りにご尽力載くよう同窓会の皆さんにお願いしたい。

御挨拶

衛生技術学科長
千　田　重　男

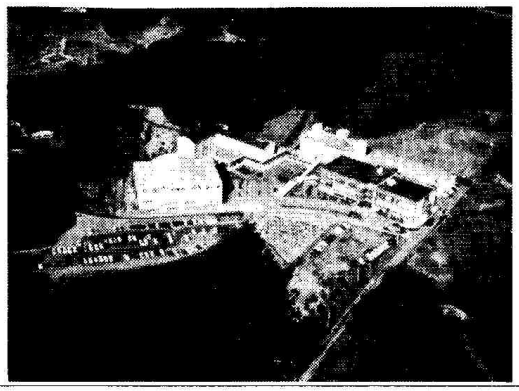
本学も昭和五十八年四月に国際医学総合技術学院より岐阜医療技術短期大学に昇格してすでに四年余の歳月が経ち、この春には第二回の短大卒業生を社会に送り出しました。昭和四十八年学院開設以来、衛生技術学科の卒業生は総数一四三三名（学院一二七三名、短大一六〇名）となり、大多数の同窓生諸氏はそれぞれ全国の病院、医療機関の第一線でお元気で御活躍のことと存じ、お喜び申します。

近年の医学および臨床検査技術の発展はめざましく、医療の中に占める臨床検査の重要性はますます大きなものとなっています。このような技師教育の観点ばかりでなく、医療の現場において適正な検査業務を行うという立場からも、技師教育と検査業務の現状とあるべき姿を踏まえて、全国的に臨床検査技師学校のカリキュラムが大きく改正され、本学もこの四月の新入生から実施に入りました。改正の要点は、従来の専門科目を基礎専門科目と臨床（検査）専門科目とに分類、整理し、前者では臨床検査技術の基礎学力の習得を重視し、後者では例えば新たに病理組織細胞学、臨床免疫学、検査管理総論などを分離、新設し、全般的には講義、実習を有機的に組合せて教育効果を上げるよう配慮されています。また、医療従事者としての倫理、臨床医学の中における検査の位置づけ、精度管理、検査機器の保守、検査業務などの実習にも充実が要望されており、本学としても限られた年限でこれらのカリキュラムを円滑に定着させるにはなかなかのことと考えています。

一方、臨床検査技師の国家試験も明年（昭和六十三年三月）より年一回のみの実施となり、三年後の昭和六十五年からは右記の新カリキュラムの内容で出題されることになります。

本学も目下、短大としてその基盤を堅めるのに精一杯の努力をして参りましたが、さらに学内協力一致して、新しい臨床検査技術者の養成に一層の精進が必要と痛感しています。どうか、同窓会の皆様からも後輩への暖かい御激励と卒直な御助言を是非お願いしたいと存じます。また、この会報の発刊を機会に、母校と同窓会の皆様方との交流が一層深まり、何かと御協力頂ければ幸いと存じます。

末筆ながら、同窓会諸氏の益々の御活躍と御多幸を祈り、御挨拶と致します。



現在の本学の全景

S60・3に女子寮が完成し（写真左上）、また、S62・8より駐車場地にM科並に事務局棟の造成工事が着工しました。

支部だより

北海道支部長
山本 隆司（R2）

両科統一の機関紙発行、おめでとうございます。さて、私どもの北海道支部は中心地札幌ですら勤務している人は数名しかおらず、他の会員は道東、道北など幅広い地域に勤務しております。ですから一つにまとめるというのは、とても困難なことです。独自での活動は、実際問題として無理なため北海道技師会などの会合を利用して親睦を深めて行きたいと思っていますが、現在具体的な活動等は行なっておりません。

私が母校を卒業してもう十年になろうとしています。私が学生の頃は、設備もまだ十分とは言えない状態でしたが先生方の情熱がそれを補っていたように思います。現在では、いろいろな設備も整い学校の雰囲気も昔とはずいぶん変っていることと思います。学生だった頃は、知識ばかりが先行しあまり重要視していませんでしたが、実際職場に入ってからは、ペーシェント・ケア　人と人とのふれあいが患者さんとのふれあいが、いかに大切かということを実感させられます。入院される患者さんにとって身体の痛み、手術の不安、いらだちなど身体的な病気はもちろんですが、心にも病いを持っている人が多いのです。医師又は、病院関係者は、不安定な気持ちを少しでも取り除いてやらなければならないのです。そのためには、私たちも毎日が勉強です。患者さんに信頼感を持ってもらうために、親切にわかりやすくと心掛けております。又患者さんにも多くのことをおそわります。「言うは易し、行なうは難し」と言うように、患者さんの気持ちになるということは、難しいことですがこの心掛けを忘れずに頑張って行きたいと思います。話は多少それましたが、何かと御苦労も多いこととは思いますが、このたびの機関紙発行に心から御祝い申し上げます。

敬具

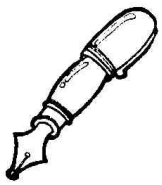
北陸支部長
朝野 洋一（M1）

記念すべき機関紙の原稿依頼が届き、文才のない私にとっては背負う事のできない大きな荷物であり、できるものならばご免被りたいと思ったが、依頼書の中の「本会に活を入れるため…」の一言に一回生としての責任を感じペンを執った。

十数年前、国際医学を卒業し就職した頃は、ピペット片手に試験管を振り、恒温槽や比色計を相手に検査をしていたが、現在では分析機器の管理と検体運搬が主な仕事になってきていて、今後はコンピューターやフルオートの機械等を使用した新たな検査システムが導入されようとしている。それに伴い我らの新たな仲間の技術の発揮する場が年々厳しくなってきている。今我々医療人は、大きな転換期を迎えつつあるように思う。このような時こそ、もう「おじん」と呼ばれそうな我々の経験と、卒業して間もない若い仲間の新しい知識が組合えばこの困難も難なく乗り越えれるだろう。同じ釜の飯を食った仲間だ、ネクタイを取ってTシャツで話し合おう、今さら恥を気にすることもないだろう、オマエのオレのぶざまな格好は三年間見飽きているし、今だに下宿の名物になっているかもしれない。わからないことは何でも聞き、困った時は仲間の誰かが助けてくれる、そんな同窓会が欲しい。全国の仲間と色々話し合えれば、井の中の蛙も大海を知れるであろう。

北陸支部としては、五、六年程前に連絡のつく範囲で酒を呑み交わしたことがあり、確か二十五、六人の仲間が集まったように覚えている。その後は、病院実習の様子を見に先生方が来られた時、数人に声を掛ける程度である。その他には、就職の相談を受けたり、パート職員の相談を受けたりした時に仲間と連絡をとり合うぐらいであり、ここでもう少し活発さが望まれそうである。

…同窓会と仲間の発展を心から願う…



あなたからの投稿を待っています。

体験談、研究成果、施設紹介、写真、同窓会活動報告などなど

一人ひとりの手で育てよう〝群青の風〟

事務局まで

中部支部長

交告利久（M1）

この度、同窓会機関紙が定期発刊されるとのことで関係の方々、大変ご苦労様です。

医療界に入って十年を経過した今、改めてふり返るとこの間の急激な変化には驚かされます。特に検査機器は、エレクトロニクスの進歩を反映し、その技術革新には目を見はるものがあります。

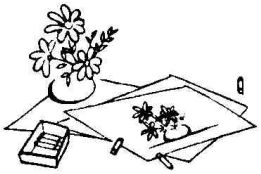
また医療界を取りまく事情も大きく変化しようとしています。聖域視されていたこの世界にも合理化の波が押しよせ、従来の検査室のあり方から、経営母体や病院規模の違いによっていろいろな形態の検査室が登場するようになりました。たとえばエレクトロニクスとメカトロニクスの工場と化した検査室や検査センターから技師が派遣されて職員のいない検査室等、極端な例もあります。

反面これらのことは、現在の医療が検査重視であるためともいえます。小病院でも大病院でも医師が要求する検査情報に変りはなく、それには的確に答えていかなくてはなりません。また検査の自動化により検査精度も大きく向上し、検査成績も早く出ることにより患者サービスに貢献しています。合理化と患者サービスというジレンマの間で現在の医療界はまさに過渡期を向えようとしています。

少し前置が長くなりましたが、我々医療界で働く者にとって、このような変化は驚異であり、脅威であり、興味でもあります。

新しい時代の波にもまれながらもより人間らしく自分を見失うことのないよう努力していきたいと思いますが、このような機関紙による情報交換や同窓会活動はこれからの時代にとても必要となってくることと思います。

現在底迷している支部活動もこれをきっかけに、より活発なものにしていきたいと思っております。



専任教員名簿

学長・理事	小林瑞穂	
一般教育		
教授（街生技術学科長・図書館長）	千田重男	化学等
講師	伊藤実	法学等
講師	竹本康史	保健体育等
講師	松波勉	英語等
衛生技術学科		
教授	小林瑞穂	医動物学等
教授	鈴木祥一郎	微生物学等
教授（校医）	蟹江匡	臨床病理学等
教授	斎藤富樹	臨床血液学等
教授	佐藤侑子	生理学等
教授（教務主任）	三宅正美	臨床微生物学等
助教授	竹内よし子	解剖学等
講師	黒部真章	生化学等
講師（教務担当）	只野憲二	検査機器総論等
講師（実習担当）	山城光俊	臨床検査総論等
講師	吉岡義正	公衆衛生学等
助手	島澤司	病理組織細胞学実習等
助手	丹羽民和	臨床血液学実習等
診療放射線技術学科		
教授（学科長）	久保田保雄	放射線治療技術学等
教授（教務主任）	杉浦武	放射線物理学等
教授	森内和之	放射線計測学等
助教授	岩崎雄二	解剖学等
助教授（教務担当）	小島克之	画像工学等
講師	久保恒治	放射線機器工学等
講師	蔡篤儀	電気工学等
講師（実習担当）	橋本幹男	RI検査技術学科等
助手	小野木満照	X線撮影技術学実習等
助手	山田功	放射線機器工学実習等

雑感

前学生部長
教務主任　三宅　正美

同窓生の皆さん、久しぶりです。国際医学総合技術学院の閉校記念式典を実施してもう二年がたちます今日この頃です。今年三月短期大学として二回目の卒業生を出し、卒業生諸君も昭和五十一年三月国際医学第一回卒業を最初として、今年三月で約二千余名（両科、短大卒を合わせて）を送り出したことになります。これから先もどんどん増えていく事と思いますが、私として本当に嬉しく感じます。昭和四十九年私が赴任した当時に比べると現在は格段の相違があります。教職員の数も四十余名になり、私事でございますが本短大で最も古い人間となりまして年齢を感じさせるようになりました。又、施設関係でも変わり、R科の実習棟一棟、学生寮（清心寮女子のみ）が建ち、周囲の環境も随分変りました。（M科の実習棟は昔のままですが）そして将来計画としてM科実習棟の新築、運動場の拡大、テニス、バレー等のコートの新設等があげられております。

将来が楽しみです。

さて、学生数も短大に昇格とともにM科八十名、R科八十名の定員となり前身校に比べると、M科は定員が減り、R科は増えており、総定員としては変りません。又、教育内容は今年四月より教育課程が改正され、国家試験が来年より年一回となります。そして学生についてですが、「学生気質」というものも、やはり変わってきております。医療という場を充分に理解できないまま卒業してゆくものもおり、教育のむづかしさを感じます。国家試験に合格すれば何とかなるという時代はもう終ったわけで検査技師としての「質の向上」が叫けばれております。医療に携わる人間としての人間形成が最も重要ではないかと思います。現在の学生は本学の学生のみではなく、全国的に目的意識がはっきりせず、何事によらず、意欲的でないという状態が多いと聞いております。世界の経済大国になったがために日本では、ある面では良い面ばかりかもしれないが、一方では堕落（道心を失なっている）している部分があることは否定できないと思います。この点においては、我々自身も常に反省をしなければならないし、教育の点においても原点にもどって対処せねばならないと思っております。

卒業生の皆さん、これからどんどん若い技師の卵がでていきます。社会人として、医療に携わる技師として、大いに先輩としてご指導をお願い致します。我々も初心にもどって、一層技師教育に専念する覚悟ですので、今後ともよろしくお願いする次第です。

〝診療放射線技術学科の現況〟

学生部長
教務主任　杉浦　武

今年短大として第二回生が卒業し、国際医学総合技術学院から通算して第十一回七〇一名の卒業生が社会に巣立ちました。病院巡回等で卒業生諸君の話を聞くたびに本学在学中の事が思い浮かぶのと同時に活躍している姿を大変うれしく思っております。

現在、諸君らの母校のR学科は、専任教員十名で二九四名の在学生の毎日の教育に携わっております。

カリキュラムは、昭和五十八年の短大移行時、丁度厚生省の指定規則変更時であり、旧規則と新規則を混合し、さらに本学の特色を加えた型で短大一回生から四回生までの教育が行なわれました。短大として四年経過した時期に見直しをはかり、最近の医療部門の状況を見てそれに対応できる基礎学力、技術の修得と共に、社会に出て伸長できるポテンシャルをもつ学生の育成を目指し、昭和六十二年より新カリキュラムで教育を行っております。幸い本学科への志願者は国際医学時代とかわらず全国から集まり、一昨年は二・五倍、昨年は三・七倍の入学倍率がありました。また、国家試験の合格率は昨春の短大一回生が九四・四％（全国平均六七・二％）、今春の二回生が八六・四％（全国平均五九・一％）であり、今春の結果は全国の国公私立短大中第二位であります。先輩諸君に続けと後輩も頑張っており、これがとても大事なことであります。最近の放射線技師の業務内容、レベルにおいて格段の進歩があり、その方向性また医学全体に対する方向性についても変化の時代であります。この時期放射線部門で活躍している諸君から学校あるいは実習生に対しあたたかく厳しい助言をお願いしたいと思っております。学校自身も将来を見すえた計画、資質の高い学生の輩出に努力しております。将来の諸君及び学校の発展には卒業生諸君の活躍、卒業生間及び本学との連係、本学における内容ある教育及び病院実習、優秀な学生の入学というラインの確立が必要であります。そのためにO・B会の活動、O・B会員の放射線技術部門での活躍が大事であり期待しております。

卒業生諸君におかれては、医療に携わる者としての心を大事にされ、たゆまなき勉学、研究を進め、進歩しつつある放射線技術分野の中核として活躍してほしいと熱望しております。全国に散った卒業生諸君と顔をあわせ、グラスを傾けながら話が出来る機会を楽しみにしています。

最後に卒業生諸君のご健康と御多幸を祈念いたします。

母校通信

◎部活動状況

「バスケット部」

第10回岐阜県学生バスケットボール選手権大会の成績を報告します。

（男子）

5月17日(日)会場・岐阜高専
岐阜高専　69－16　岐医短

5月24日(日)会場・岐阜大学
岐医短　34－27　高山短
岐薬大　48－42　岐医短

5月31日(日)会場・岐阜高専
岐大・医　46－38　岐医短

6月7日(日)会場・岐教大
岐阜大　102－32　岐医短

6月14日(日)会場・岐阜大
岐経大　75－62　岐医短
朝日大　92－34　岐医短

6月21日(日)会場・岐阜高専
岐教大　78－28　岐医短

（女子）

5月16日(土)会場・岐阜高専
東海女短　58－36　岐医短

5月17日(日)会場・岐阜高専
岐医短　44－38　岐女大

5月23日(土)会場・岐阜高専
岐医短　80－21　岐薬大

5月24日(日)会場・岐阜大
岐医短　65－31　岐女短

5月31日(日)会場・岐阜高専
岐医短　63－39　岐大看護

6月7日(日)会場・聖徳女短
岐医短　81－49　聖徳女短

6月14日(日)会場・岐阜大
岐阜大　67－50　岐医短

6月21日(日)会場・岐阜高専
岐阜教大　65－28　岐医短

「バドミントン部」

一昨年、消えかかっていた……というより、消えてしまっていた我がバドミントン部、有りし日のバドミントン部の先輩にも呼び掛けて、去年細々とではあるが、複活した。

一年生だけでの練習、キャプテンまで一年生……それが今では……皆の努力と有力新人部員の入部もあって、県リーグにも参加している。

家庭的な雰囲気が自慢のバドミントン部、今日も頑張っています。

6月6日(土)、7日(日)
県学生春季大会

〈男子〉
シングルス
一回戦　敗退
ダブルス
ベスト　8

〈女子〉
シングルス
一回戦　敗退
ダブルス
一回戦　敗退

「バレー部」

〈男子〉

年間の公式戦としての最大行事である岐阜県私立短期大学戦に一昨年初優勝し、さらに昨年には連続優勝を果たしました。今年メンバーは、二年生が中心ですが、力量としては、昨年と同格もしくはそれ以上で三年連続優勝をめざしています。関リーグ戦・中濃リーグ戦も定着化し、又関市役所・貝印株式会社との定期戦も定着化し、来年度からは県リーグに加入することに決定致しました。今後の活躍にご期待を……。

男子バレー部成績

61年10月10日
岐阜県短大戦
会場・東海女子大体育館
準決勝戦
岐医短2　12－15
15－8　1高山短大
15－8
決勝戦
15－7
岐医短2　0中日本短
15－11

〈優勝〉

62年5月17日
中濃リーグ戦
会場・下有知小体育館
岐医短0　10－15　2関クラブ
4－15

三位決定戦
15－4
岐医短2　0排友会
15－12

〈第三位〉

今後の予定
62年10月10日岐阜県短大戦
62年11月8日中濃リーグ戦

〈女子〉

相変わらずレギュラー中に経験者が一～二名しかいないためチームというには程遠いですが、それなりに楽しいバレーをめざして頑張っています。現在部員数は一年九名、二年七名、三年十二名の合計二十八名です。昨年度は年間二十八名です。昨年度は年間一勝しかできず、今年度は年間二勝をめざしています。よろしく。

女子バレー部成績

61年10月10日
岐阜県私立短期大学協会
体育連盟体育大会
会場・東海女子大体育館
一回戦
15－7
岐医短2　0聖徳学園
15－3　女子短大

二回戦
10－15
岐医短0　2中部女子短大
2－15

〈第三位〉

62年5月17日
中濃六人制バレーボール大会
会場・下有知小体育館
岐医短0　6－15　2関クラブ
3－15

今後の予定
62年10月10日岐阜県短大戦
62年11月8日中濃リーグ戦

同窓会会計報告

〈収入の部〉

項目	61年度決算	62年度予算
会費	900,000	900,000
繰越金	1,889,080	2,181,203
その他	281,962	
合計	3,071,042	3,081,203

〈支出の部〉

項目	61年度決算	62年度予算
活動費	102,020	250,000
会議費	177,880	150,000
交通費	126,000	200,000
慶弔費	5,220	5,000
通信費	46,070	130,000
助成費	411,960	20,000
その他	113,879	60,000
予備費	2,088,013	2,396,203
合計	3,071,042	3,081,203

＊同窓会事業報告＊

○昭和60年度事業報告

同窓会記念誌として、閉校記念誌に会員名簿を加えて発行し、また両科同窓会を全国学会に併せて、岐阜及び東京において開催した。

○昭和61年度事業報告

国家試験時に、初めての企画として、両科学生にパンと牛乳の配布と、卒業式に記念品を贈り、たいへん好評を得られた。試験会場周辺には、昼食をとれる様な場所がなく不便であり、学生を応援し元気づけるためにも行なった。また卒業して同窓会にはいっていただくということで、卒業生に記念品（湯飲み茶わん）を贈らせていただきました。

○昭和62年度事業予定

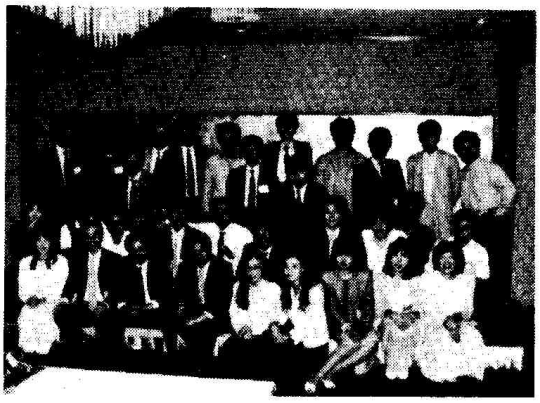
前年度にひき続き、継続事業として、国家試験時のパンと牛乳の配布及び、卒業生への記念品贈呈を、同窓会へのよりいっそうの関心をもっていただくためにも続けていく予定です。またさらに機関紙『群青の風』を毎年1回発行してゆくことになりました。同窓会活動が沈滞化することなくより活発に運営できる様、会員のみなさんの御理解と御協力をお願いします。

昭和61年5月4日
岐阜市　岐山会館にて

第35回日本臨床衛生検査学会岐阜大会に併せ、同窓会を開催しました。

同窓生に加え、母校から小林学長、三宅前学生部長、斎藤前衛生技術学科長、山城先生のご出席を頂いた。

和気あいあいとした雰囲気の中で、時間が過ぎ去った。



昭和61年4月5日
東京都　新橋第一ホテルにて

第42回日本放射線技術学会東京大会に併せ、同窓会を開催。

日本放射線技師会から斎藤勲副会長、母校から小島先生のご出席を頂いた。

先輩、後輩同じ和の内でなごやかに学生時代のエピソードが飛びかいました。

昭和62年3月5日
名古屋市内の国家試験会場にて

同窓会活動の1つとして準会員に対し、卒業記念品（同窓会の名称入り湯飲み茶わん）を贈与し、また昼食の心配なく国家試験に集中できるよう、パン・ジュースを無料配布しました。卒業生からまた来年度以降もよろしくお願いしますとの声が大でした。

組織図

岐阜医療技術短期大学
（旧国際医学総合技術学院）
同窓会総会

役員会（最高執行機関）

幹事会（最高決議機関）

代議員会

（各学年代表）

各学年幹事・役員

国—M—1	後藤	清
2	坂本	寛文
3	木村	泰
4	前田	晃
5	板屋	善雄
6	森	晴雄
7	林	博之
8	岩佐	雅子
9	伊東	明宏
10	佐伯	浩和
短—M—1	朝日	佳子
2	武藤	延秋
国—R—1	大塚	誠
2	井上	義則
3	増田	豊
4	末松	弘志
5	山田	克彦
6	丹羽	誠
7	井上	文浩
8	渡辺	享信
9	棚瀬	一友
短—R—1	大野	宮利
2	千原	勉

事務局

RM
丹羽民和（短—M—2）
小野木満照（国—R—4）
関市市平賀字長峰七九五—一
（〇五七五）二二—九四〇一

※支部長会

北海道	松田直哉	M科（国際卒業回数）（2）〈〇一三八〉五一—二二九五
東北	青山忠典	（2）〈〇二四二八〉三—二五一一
関東	長谷川正信	（1）〈〇三〉八一三—三一一一
中部	交告利久	（1）〈〇五七四七八〉二〇二三
北陸	朝野洋一	（1）〈〇七六四〉二四—一五三一
近畿	竹中清悟	（1）〈〇七二三〉六六—〇二二一
中国	楠木晃三	（2）〈〇八二〉二四—三一一一
四国	井上秀樹	（2）〈〇八七八〉七六—一一四五
九州	猿渡清孝	（2）〈〇九四四五〉四—八四八二
	佐藤順一	R科（3）〈〇一一〉五八二—九四九八
	渡部育夫	（2）〈〇二四二〉二七—二一五一
	森田良昭	（2）〈〇三〉七六二—四一五一
	前田重光	（1）〈〇五八二〉四五—三一五六
	石田智広	（1）〈〇七七六〉二六—二六三〇
	津田康弘	（2）〈〇七七五〉二二—四一三一
	岡村雅善	（1）〈〇八二〉二二六—三五一五
	寺川保記	（1）〈〇八八七三〉四—三一一一
	田之上博	（2）〈〇九八三〉四二—一三三〇

※ 連絡先は勤務先です。

※支部総会

ブロック長会
ブロック会（各県）

各県もしくは2～3県にての活動を中心として、同窓会活動を行う。

支部長（MR各1）
副支部長（MR各2）
ブロック長（MR各数名）

同級生・クラス会

※ 事務局に連絡すれば、1人500円の補助あり。

同窓会会員

正会員（卒業生）
準会員（在学生）
賛助会員（大学職員）

※ 従来は各学年ごとの活動が中心でしたが、遠隔地ではなかなか活動が思うにまかせなかったと思われます。そこで、各支部単位での活動をしていただき、縦と横の線にての同窓会を目指す予定です。※印は今後の計画ですが、すでにブロック会などを行っている地区や現在立案中の地区は、是非、各支部長と連絡をとりあって下さい。

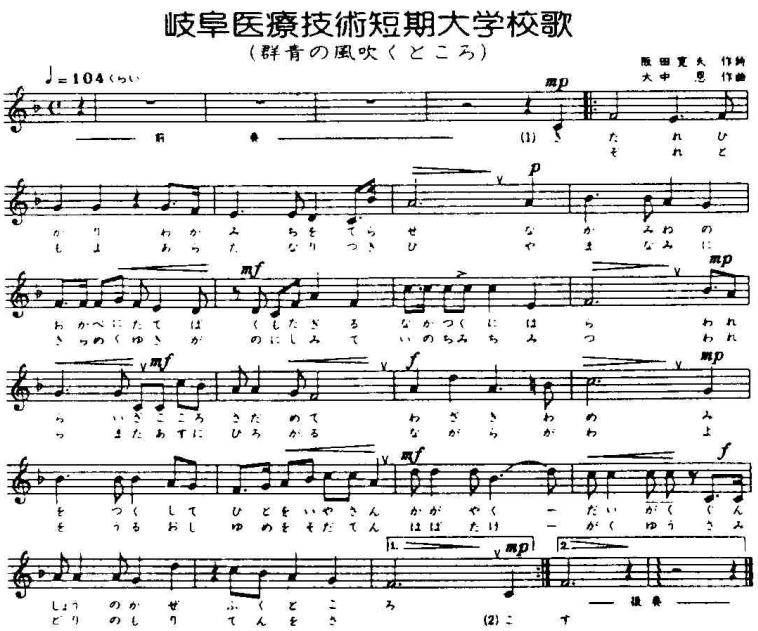
岐阜医療技術短期大学校歌

―群青の風吹くところ―

阪田寛夫 作詩
大中恩 作曲

一、来れ　光
わが道を　照らせ
長峰の丘辺に　立てば
雲たぎる　中つ国原
われら　いざ
心さだめて　技きわめ
身をつくして　人を医さん
かがやく　大学
群青の風　吹くところ

二、挙れ　友よ
新たなり　月日
山脈に煌く雪が
野にしみて　いのち充ち満つ
われら　また
明日にひろがる　長良川
世をうるおし　夢を育てん
はばたけ　学友
早緑の森　天を指す



編集後記

社会に飛び出せば業務に追われる毎日の連続です。ゆっくり落ち着いたムードにひたる余裕すらありません。

増して母校への回想など全くありません。

同窓会はそんな会員の皆さんに二十代前半、青春を謳歌した長峰の丘をなつかしんで頂くそんな一時のやすらぎを与え、さらに会員相互の絆をより一層深く強く結び付けるための心の掛け橋となり得るよう今こそ何かをしなくてはなりません。以前から事あるたびに本会を真の同窓会に成長飛躍させよう、皆さん頑張ろうと力説して参りましたが、今だに波に乗りきれていません。しかし、もうこれ以上の時間延長はダメです。本部は必死に悩み、検討しそして遂に〃機関紙の発刊〃という結論に達したのです。このことは長くて暗い闇の中、はるか向うにほのかな灯を見い出した様な心境でした。

過去、M・R両科別々に刊行されたことはありましたが、いずれも長続きすることなくまるで尺玉の花火のごとく創刊号のみで終止符が打たれました。今回の機関紙は、初めての両科統一のものであり、三度目の創刊号です。会員の心中を察すれば〃仏の顔も三度〃という方も少なくないことと思います。よって我々は背水の陣で機関紙作成に参画しました。他団体のものを参考に議論を重ねること三十時間、毎週集まり深夜に及びました。

今回の発刊には支部長、学校関係者他、多方面に渡ってのご投稿のお陰でなんとか形が整いました。御協力ありがとうございました。

さて機関紙のタイトル「群青の風」は、学歌のサブタイトルから引用致したものです。勿論、題名の選考に当っては編集委員十二名により慎重に審議を行い、多数の候補の中から厳選しました。母校の周囲は皆さんが巣立った頃とあまり変化がありません。緑の山々が展望でき、抜けるような青い空の下、心地よい風がサッーと吹き抜ける丘辺に立たれた作詞家阪田寛夫先生に「群青の風」という表現が生まれたのも「なるほど」とうなずける気がしませんか。

筆字は小林瑞穂学長によるものです。永遠に残る機関紙の顔にふさわしい筆字です。

今回を機に毎年継続的発刊を、たとえ役員の交代があっても行わなければなりません。全国二一三四名の会員一人ひとりの手で育てて行かねば機関紙の存続はあり得ないのです。今回は、創刊号ということで、挨拶文などが目立ちましたが、次号からは会員からの投稿にて全紙面を飾りたいものです。

ご協力よろしくお願いします。

住所、勤務先など異動のあった方は事務局まで〃
異動のない人も同封のはがきで近況報告を。

―小野木・丹羽―